

書評『大型プロジェクトの評価と課題』

最近、なんだか昔お世話になった先生を思い起こす。岡山大学の故・坂本忠次先生もその一人だ。先生は財政学や地域経済の分野で著名であり、学会などでよく声をかけていただいた。財政学の大家であるが、昔から親しみやすい先生であった。水島コンビナート調査などでお世話になった。

先生から依頼され執筆したのが、表題の「岡山大学経済学会誌」に掲載された書評だ。20年近く前になるが、久しぶりに読み返してみた。一部でも抜粋して紹介しよう。

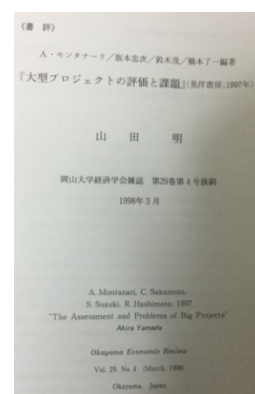
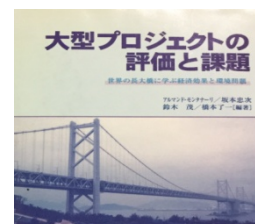
公共事業は行財政改革の焦点となっており、予算削減や事業見直しが提案されているが、本格的な改革にはほど遠い。バブル崩壊後も開発志向はやまず、環境に重大な負荷をあたえながら、全国各地で開発事業が官民一体ですすめられている。

「借金大国ニッポン」において、なぜ公共事業に予算が大盤ぶるまいされ、開発優先の大型プロジェクトがつづくのか。そのメカニズムの解明は、現代日本の政治経済や行財政にとって重要な課題であるが、とりあえず次の4点を指摘しておこう。

①公共事業が我が国の経済社会に組み込まれ、政・官・業からなる「公共事業複合体」がきわめて大きな力を持ち、現実の政策展開に影響をおよぼしている。「霞ヶ関発の錬金術」とよばれるものだ。②資本蓄積の基盤を形成する社会資本整備が経済構造改革の戦略手段とされ、財政制約下でも重点投資が続いている。③現行の公共事業や社会資本整備のシステムが、「公共事業複合体」による大型公共事業を推進させている。道路整備5ヶ年計画と道路特定財源がその典型。④地域と自治体レベルから公共事業に大きな期待があり、地域「活性化」めざして地域間競争を繰り広げている。足もとから「土建国家」をつくりあげている。

こうした公共事業の政治経済的なメカニズム、これからの公共事業や開発のあり方を考えるうえで、1997年6月に刊行された本書(次ページに目次)は多くの示唆をあたえる。

本書の副題は「世界の長大橋に学ぶ経済効果と環境問題」であり、経済と環境の両面から長大橋などの大型プロジェクトの問題点を具体的に検証している。なるべく評者の問題意識に即して紹介しながら、公共事業の課題と方向を考えていきたい。



(2017年2月18日)

目次

第1部 世界の大型プロジェクトが直面する主要な課題

アルマンド・モンタナーリ

「架橋・トンネル建設をめぐる経済効果予測の国際的経験」

補論「国際的経験—90年代前半における主要な経験」

第2部 架橋の経済効果と環境問題

坂本忠次「瀬戸大橋の総合経済効果

—地域経済への影響と架橋の財政問題」

磯部作「瀬戸大橋の環境問題—『環境アセスメント』を中心に」

鈴木茂「瀬戸内海大橋の経済効果—事前評価と地域開発」

竹内壮一「東京湾横断道路と地域開発計画

—千葉県木更津市金田地区の開発計画」

松岡俊二「プロジェクト・アセスメントにおける環境影響評価 (EPA)
と経済的評価」

@巻末には本四架橋の建設計画や開通後の利用状況、本州四国連絡橋公団の財政状況に関する数多くの基礎的資料が収録されている。